

## 情報紹介

## 矢代幸雄とバーナード・ベレンソン：往復書簡（1923–1959）の概要

越川倫明

本稿は2015年6月30日よりフィレンツェのヴィットラ・イ・タッティ（ハーヴァード大学附属イタリア・ルネサンス研究センター）のホームページ上で公開された矢代幸雄とバーナード・ベレンソンの往復書簡の概要を記したものである。これらの書簡は、ジョナサン・K・ネルソン（ヴィットラ・イ・タッティ、学術プログラム担当副所長）、山梨絵美子（東京文化財研究所、企画情報部長）、越川倫明の共同企画によるオンライン展覧会 *Yashiro and Berenson: Art History between Japan and Italy* (<http://yashiro.itatti.harvard.edu/>) の一環として公開された。以下の文章は、同展の書簡部分の序として掲載された筆者の英文原稿 “The Yashiro-Berenson Correspondence” に若干の修正を加えて和文にしたものである。各書簡に付した番号については、末尾に掲載した一覧を参照されたい。

矢代家所有の書簡、写真類の研究上の使用および公開を快く許可してくださった矢代若葉氏に心より感謝申し上げます。また、ベレンソン書簡の原本の調査に便宜をはかってくださった神奈川県立近代美術館の橋秀文氏、藤代知子氏にも深謝したい。なお、本稿は平成26–28年度科学研究費補助金、基盤研究(C)一般「バーナード・ベレンソンと矢代幸雄の往復書簡に関する研究」（研究代表者：越川倫明、研究分担者：山梨絵美子）の成果の一部である。



fig. 1 矢代幸雄（1921年頃）、個人蔵

美術史家矢代幸雄（1890–1975）（fig. 1）は1921年から1924年にかけてフィレンツェでバーナード・ベレンソン（1865–1959）のもとでイタリア・ルネサンス美術を学び、1925年にロンドンで大著『サンドロ・ボッティチェリ』を刊行した<sup>1</sup>。同年日本に帰国した矢代は、ベレンソンから学んだ作品研究の方法を基盤としつつ、研究対象を東洋美術に移し、やがて東洋美術研究の分野で重要な功績をあげていく。ベレンソンと矢代の師弟関係は、日本における美術史学の発展史のなかで非常に重要なエピソードとなった<sup>2</sup>。実際矢代は、システマティックな作品写真の収集を基礎とする様式批判の方法を初めて日本に導入し、東洋美術の研究に適用していく。その方法論的理想は、1930年に矢代の提言に基づいて設立された帝国美術院附属美術研究所（現在の東京文化財研究所の前身）の運営方針に具現化されることとなった<sup>3</sup>。

日本に帰国後も矢代はベレンソンと接触を保ち、両者の文通・交流は1959年のベレンソンの没時まで続

いた。ヴィットラ・イ・タッティに保存されているベレンソン関連文書に、ベレンソンおよび妻メアリーに宛てた計 66 通の矢代書簡が存在することは、以前から知られていた<sup>4</sup>。しかし、矢代家に 44 通のベレンソン書簡が保存されていることが知られるようになったのは、ようやく 1990 年代のことである<sup>5</sup>。現在、それらの書簡の大半は、葉山の神奈川県立近代美術館に寄託されている<sup>6</sup>。

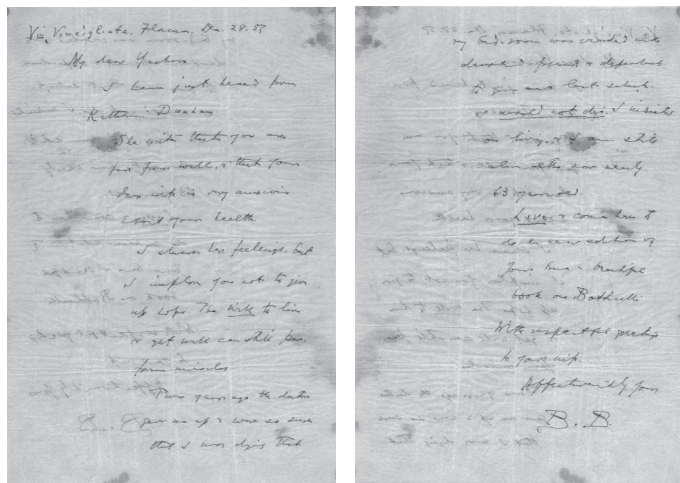
これまで二人の往復書簡は、部分的に引用されることはあっても、全体として公刊されることはなかった。しかしそれらは、二人の傑出した美術史家のあいだの長期にわたる友情を記録した、きわめて興味深い資料となっているのである。現存する手紙の年代は 1923 年から 1959 年におよび——第二次世界大戦による不可避的な中断をはさんで——、親密な意見の交換、種々の依頼事、助言、情愛のこもったあいさつ、励ましや慰めの言葉などを記録している。今回、ヴィットラ・イ・タッティ（ハーヴァード大学付属イタリア・ルネサンス研究センター）のホームページ上で、オンライン展 *Yashiro and Berenson: Art History between Japan and Italy*（矢代とベレンソン：日本とイタリアをつなぐ美術史）がオープンし、往復書簡の全貌が翻刻・公刊されることとなった。

今回の公開に含まれる書簡は、以下の通りである。

- ・矢代からメアリー・ベレンソン宛：7 通（1923-24 年）
- ・矢代からベレンソン夫妻宛：6 通（1924-27 年）
- ・矢代からバーナード・ベレンソン宛：53 通（1924-59 年）
- ・バーナード・ベレンソンから矢代宛：45 通（1933-57 年）
- ・ニッキー・マリアーノ（ベレンソンの秘書）から矢代宛：3 通（1956-59 年）
- ・エリザベス・ベレンソン（ベレンソンの妹）から矢代宛：1 通（1959 年、ベレンソン死去の直後）

矢代書簡の原本はすべて、ヴィットラ・イ・タッティのアーカイブに保存されている。ベレンソン書簡は、一通の例外の除き、上述のように神奈川県立近代美術館に寄託されている。その例外というのは、1957 年 12 月 28 日付の手紙（no. 108）で、この書簡は矢代にとって特別な愛着の対象だったものである<sup>7</sup>。すなわち、当時重篤な病気で入院していた矢代にベレンソンが送った激励の手紙で、矢代はそれを「いつも上着の内ポケットに入れて持ち歩いている」（1958 年 1 月 28 日付の書簡、no. 109）と書き、のちに額装されて矢代家に飾られていた（figs. 2, 3）。

往復書簡の翻刻・研究の上で、ひとつの大きな困難は、矢代がしばしば書簡に日付は付しながら、西暦年を書いていないことである。そのため、ヴィットラ・イ・



figs. 2, 3 ベレンソン書簡（1957 年 12 月 28 日）、個人蔵

タッティのアーカイブにおいても、書簡の年代的な分類がなされていない状況にあった。そのため、今回の翻刻作業では、少数の例では封筒の消印から年代を確定できるケースもあったが、それ以外は手紙の話題・内容から年代を推定する必要があった。幸いなことに、ベレンソンの書簡は常に年代を明記しており、両者の手紙を相互に対照することで、ほぼすべての矢代書簡の年代を特定することが可能となった。

### 書簡の話題の概要

各時期の書簡に見られる主要な話題を要約すると、以下のようになる。

#### 1) 1923-25年 (nos. 1-13)

この時期には、ベレンソンから矢代への手紙は残されていない。現存する矢代の手紙は、バーナードよりも主に妻メアリー・ベレンソン (1864-1945) に宛てられており、現存する最も早い書簡は1923年11月10日付 (no. 1) となっている。矢代は同年9月1日の関東大震災で父親を亡くしていた。この知らせによって激しく動揺し抑鬱的な気分になりながらも、ロンドンから発送されたこの手紙のなかで、矢代はポッティチェッリに関するなんらかの成果を出版するまで帰国を延ばす決心をメアリーに語っている。翌1924年の初夏、矢代はフィレンツェのホテル<sup>8</sup>からベレンソンに手紙を書き (no. 5)、ポッティチェッリ論の執筆に集中するため、アペニン山中のアペトーネに向かう旨を告げている。その後、同年8月22日にロンドンから発送された手紙によれば、矢代はこの頃すでに東洋美術に関するなんらかの著作を刊行する企画も考えていたことがうかがえる (no. 8)。ロンドンでの仕事を終え、1925年のはじめにアメリカで講演のための短期滞在をしたのち、同年春に矢代は日本に帰国した。

#### 2) 1927-28年 (nos. 14-17)

この時期には、矢代の4通の手紙が残っており、一方ベレンソンの側からの手紙は現存しない。はじめの3通はヨーロッパ旅行の旅先から送られたもので (nos. 14-17)、最後の1通は帰国直後に書かれている (no. 17)。ロンドンから発送された1927年10月4日付の書簡 (no. 14) はベレンソン夫妻宛で、彼の「美術研究所」<sup>9</sup>に関する最初の言及がある点で興味深い。

貴方の指導の下で学び、貴方の厳密な美術研究の手法をできる限り吸収した後、私には極東での美術研究の現状が非常に不満足なものに思われ、そこで日本の心ある人々に話をし、ひとつの研究所を設立するように説得することができました。そこでは事実上、貴方の研究方法が東洋美術の分野で追究されることになります。もしかすると、この「美術研究所」についてロバート・ウィット卿<sup>10</sup>から貴方のお耳にも入っているかもしれませんね。来年には開所する予定で、私はその所長になる予定なのです。(筆者訳)

同じ手紙のなかで、矢代は木村文と結婚したこと (1925年) も師に報告している。次いで、1928年4月付の手紙 (no. 16) からは、先立つ2月に矢代がヴィッラ・イ・タッティにベレンソンを訪問していたことがわかる。その際に彼はベレンソンからなんらかのアドバイスを受けたことに言及しているが、その内容は明らかではない。

### 3) 1933 - 42 年 (nos. 18-35)

その後 5 年ほどの間隔をおいて、1933 年 7 月 14 日に矢代はベレンソンに書簡を送っている (no. 18)。この手紙は、矢代がケンブリッジ（マサチューセッツ州）のハーヴァード大学で招聘教授として東洋美術を講じた（1932-33 年）<sup>11</sup>、そこから帰国してまもない頃に書かれている。この手紙に対するベレンソンの返信（8 月 4 日付）は、ベレンソン側からの現存する最初の手紙となっている。これらの手紙の話題のひとつは、矢代がフィラデルフィア美術館で実見した中国の画卷の断片についてであり、矢代は同じ画卷に由来する別の断片がほかならぬベレンソンのコレクションにあることを知った。彼はこれらの断片が唐時代の原作に基づく南宋時代の模本と考え、美術研究所で創刊した学術誌『美術研究』で公刊するためにベレンソンに作品写真の提供を依頼し<sup>12</sup>、ベレンソンは快諾した。矢代は当時のイタリアの祭壇画研究のなかで、構成要素が散逸して各地に所蔵される作品を、様式比較を通じて再構成する手法に通じていたはずである<sup>13</sup>。このエピソードの興味深い点は、あたかも矢代がこうした手法を中国の画卷の考察に適用しているように見えることである。

1933 年から 1940 年頃まで、ベレンソンと矢代の書簡の交換は多かれ少なかれ定期的に続けられた。当時ベレンソンは大著『フィレンツェ画家の素描』の改訂版刊行<sup>14</sup>の仕事を上げつつあり、1940 年 1 月に矢代は出版された新版を受け取っている (no. 30)。一方、この時期の矢代は中国美術の研究に専念していた。ロンドンのロイヤル・ソサイエティで矢代が行なった中国絵画に関する講演原稿を読んだベレンソンは、3 月 4 日付の手紙で次のように書いている (no. 31)。

私はいつも、君がやがては自分の世界に戻って行って、私たちの方法論を君の世界の〔美術〕研究に応用してくれることを期待しており、そう思うことが私の慰めだった。だから、君が「ゆっくりですが着実に東洋美術の歴史を構築しつつあります」と書いてきたのを読むと、本当にうれしく思うのだ。これまで東洋美術は、美術商たち、気取り屋たち、文献学者たち、図像学者たちによって、いいように独占されてきた。白状するが、私はこうしたやり方にすっかり嫌気がさしており、君がロイヤル・ソサイエティでやった講演のなかで彼らのアプローチに昂然と異をと立てているのを読んだとき、どれほど新鮮な喜びを感じたことだろうか。これから君が出版していただく本に期待し、それを読めるときまで長生きできることを望んでいる。（筆者訳）

当然ながら、第二次世界大戦の勃発は二人の書簡の交換にも大きく影響した。1942 年 9 月 13 日付でベレンソンが矢代に送った葉書 (no. 35) は、「郵便サービスの停止」のために差出人に戻されている。二人の文通が再開するのはそれから 6 年後のことである。

### 4) 1948 - 51 年 (nos. 36-49)

大戦後に矢代がベレンソンに送った最初の手紙は、1948 年 5 月 9 日付となっている (no. 36)。この手紙は連合国軍のアメリカ人将校の助力でフィレンツェに届けられた。このなかで矢代は戦時中の苦い経験について語り、外国で職を得たいという希望をもらしている。矢代が死んだという噂を耳にしていたベレンソンは、8 月 5 日に返信しており (no. 38)、アメリカで矢代がポストを見つけるためにできる限りの助力を約束している。同じ手紙のなかで、ベレンソンはメアリー夫人が 1945 年に没したことも告げた。

同年の 12 月 2 日、矢代はベレンソンに長文の手紙を送り、アメリカの大学で教授職に就く希望について、

いっそう具体的に書いている (no. 39)。この手紙には、矢代が西洋におけるアジア美術研究の現状をどのように評価していたかを示す、興味深い文章が含まれている。

戦争のあいだ、東洋美術に対する西洋の関心は本当に増大してきたといえますが、西洋の学者たちによって東洋美術について書かれていることは、いまだたいへん不十分で、幼稚な内容といえます。たいそう洗練されてはいるのですが、それでもなお、まったくもって幼稚なのです。だから私は、東洋美術の諸問題について書いていくことが、自分の人間としての責務だと感じているのです。どうか自惚れと笑わないでください！優れた目をもって、様式的な発展（そしておそらくその心理的背景も）に関する正しい理解があれば、〔西洋の〕学者は、西洋だけでなく、東洋の美術の本質的な部分を把握することもできるかもしれません。とはいえ、東洋美術においては、文学と美術が非常に密接に関連し合っているのです。言語と文学についてよく通じていなければ、東洋の美術作品がもつ真の意味に到達することは事実上不可能なのです。……中国美術と日本美術についていえば、実際、こうした知識を欠いた学者たちが実に大量の本や論文を書いており、そして彼らが権威とみなされている有り様です。もちろん、極東の美術の研究においても、言語と文学がすべてではありません。確かにこの点では、逆に言語と文学ばかりに目を向けるきらいがある東洋の学者たちの研究方法は、修正される必要があると思います。しかしそれでも、言語と文学を知らなければ、東洋美術へのアプローチはきわめて幅の狭い皮相なものになってしまうことは間違いありません。私は東洋人の学者であって、しかし同時に、幸いにも BB〔ベレンソン〕の研究手法を学んで目を開かれた人間です。あえて謙遜抜きに申せば、私は死ぬまでのあいだに、東洋美術のために多くのなすべき仕事があると感じているのです。（筆者訳）

この矢代の手紙は手書きであるが、ベレンソンはその主要な部分をきれいにタイプさせている<sup>15</sup>。おそらくその理由は、アメリカの大学に所属する彼の友人たちに写しを送って、矢代を推薦するためであったと思われる。1949年12月付の矢代の書簡 (no. 41) を読むと、こうした推薦を受けた一人が、フォッグ美術館の当時の館長ジョン・クーリッジであったことが推測される。

1951年4月の手紙 (no. 44) で、矢代は近くヨーロッパへ旅行するチャンスがありそうだとベレンソンに書き送っている。彼は11月12日にロンドンに到着し、12月にはローマのイタリア中東・極東研究所で講演を行ない、同月の末から翌1952年1月までヴィッラ・イ・タッティに滞在した。

##### 5) 1952-53年 (nos. 50-66)

1951年末から52年はじめの滞在のあいだに、矢代はベレンソン・コレクションにある中国画卷の修復を日本で行なう算段をすることを約束した (no. 50)。その後矢代は、アメリカで大規模な日本美術展を開催する準備のため<sup>16</sup>、アメリカのいくつかの都市を訪問し、1952年4月に日本に帰国した。矢代の監修下に画卷は修復され、1953年4月にベレンソンのもとに戻された (no. 62)。

一方、1952年12月15日付のベレンソンの手紙 (no. 58) には、ベレンソンの著書『ルネサンスのイタリア画家』の日本語翻訳版を刊行するアイディアについて、最初の言及がある。矢代はこの企画を熱心に推し進め (no. 61)、刊行を実現するために大いに尽力していく。しかし様々な事情から翻訳の作業は遅れこみ、日

本語版が最終的に刊行されるのはベレンソンが亡くなって2年後の1961年となった<sup>17</sup>。

#### 6) 1954-55年 (nos. 67-86)

1954年12月1日付の手紙 (no. 71) のなかで、矢代は高血圧に悩んでいること、さらに同年9月に娘の葉子を若くして失った不幸について語っている。また同じ手紙のなかで、『ルネサンスのイタリア画家』の日本語版に序文を書いて送ってくれるよう、ベレンソンに依頼している。ベレンソンはこの依頼にすぐさま応じ、1955年1月4日付の手紙 (no. 72) とともに、同書のために「序文」ではなく矢代への「献辞」を送ってきた。この献辞は最終的に1961年に刊行された本の冒頭にそのまま掲載されている。この時期の往復書簡には、この日本語版に関する話題と並んで、ベレンソンが進めていた大プロジェクト『ルネサンスのイタリア絵画』についての言及がベレンソン側からしばしば見られる（「私は目下、1300年から1600年までの、私の知っているすべてのイタリア絵画の新しいカタログの仕事にかかっている。全4巻で、各巻に800点もの写真図版が入るだろう」no. 70）<sup>18</sup>。

『ルネサンスのイタリア画家』の邦訳刊行のアレンジを通じて、矢代はファイドン社の創立者ベラ・ホロヴィッツ (1898-1955) とコンタクトをもつようになり、ファイドン社から東洋美術の概説書を出版しないかともちかけられたようである。ホロヴィッツのアイデアでは、E. H. ゴンブリッチの著名な概説書『美術の物語 Story of Art』<sup>19</sup> と対応するように、矢代の本のタイトルは『東洋美術の物語 Story of Oriental Art』となるはずであった。その後ホロヴィッツが急死 (1955年3月) したこともあり、この企画は結局実現の方向をたどらなかった (nos. 73, 74, 75)。

1955年8月11日付の書簡 (no. 78) では、矢代は1952年に改訂版が刊行された自著『受胎告知』について語っているが、そこに学術的な不正確さが多く含まれていることを自覚し、いずれヴィッラ・イ・タッティに滞在して十分な再改訂をほどこし、英語版を刊行したいという希望を述べている。ベレンソンはこの考えを歓迎しながらも、矢代に東洋美術についての出版を断念しないよう促し、9月10日付の手紙 (no. 80) に次のように書いている。

とはいえ、固執するようで申し訳ないのだが、君の努力の中心部分は極東の美術に向けられるべきだと思う。君にはその知識があるのだし、ギリシア、ヘブライ、ラテン文化を背景とする私たち——中国古典や仏教、道教については知らない——に、最も適切にそれを伝えることができるのだから。君の頭と手によって、十分な図版を掲載したそのような本が書かれれば、実に価値あるものとなるだろうし、間違いなく西洋世界で大きな成功を得ることができるはずだ。(筆者訳)

続く1955年11月27日の手紙 (no. 84) のなかで、矢代はイタリア中東・極東研究所のジュゼッペ・トゥッチの招きにより、近くローマに旅行するプランについて告げている。

#### 7) 1956年 (nos. 87-96)

矢代は1956年3月3日にローマに向かって出発し、おそらく4月上旬に、当時91歳のベレンソンをヴィッラ・イ・タッティに訪ねた (no. 88)。妻の文と息子の秋雄も一緒だった。帰国後、矢代はカリフォルニアのスタンフォード大学から1年間の客員教授の招待を受けたことをベレンソンに伝えている (no. 92)。また、テム

ズ・アンド・ハドソン社から「日本美術名作選」の執筆を依頼されたことも語っている (no. 94)。この計画は、最終的に『日本美術の二千年 2000 Years of Japanese Art』(ニューヨーク、1958年)として実現した<sup>20</sup>。

#### 8) 1957-59年 (nos. 97-114)

1957年3月3日付の手紙 (no. 97) で、矢代は肺に初期の腫瘍が見つかったため、当面カリフォルニアに行けなくなったことを伝えている。放射線治療を受けた矢代の健康状態は、この年のあいだ非常に不安定であったようだが、それでも上述の「日本美術名作選」のための仕事を少しずつ進めていた。

12月になり、来日中のアメリカの著名なダンサー、カサリン・ダーナムが、ベレンソンの意を受けて入院中の矢代を訪問した。このときのことを、矢代はのちに『イタリア・ルネサンスの画家』日本語版の緒言のなかで詳しく書いているが<sup>21</sup>、ダーナムは矢代の状態が重篤であることをベレンソンに報じ、ベレンソンはすぐに、生き続けることを促す強い調子の激励の手紙を送った (no. 108)。冒頭にふれた、いまも矢代家に保管されている手紙である。

まもなく矢代の病状は回復に向かい、一方、1958年のあいだにベレンソンの健康はひどく衰えていった。ベレンソンの秘書ニッキー・マリアーノは1959年2月に矢代に手紙を書き、ベレンソンが「とても弱っていて、元気がなく」、「ほとんど話さずに引きこもっている」と知らせている (no. 111)。続く手紙では、ニッキーは矢代の本『日本美術の二千年』が届いたことを告げている (no. 112)。「BBは長いあいだその本を見ている。とても喜んでいるのですよ。図版の質の良さに感心し、書いていただいた献辞に深く感謝しています」。

1959年10月6日にベレンソンは他界した。10月18日、妹のエリザベス・ベレンソンがカリフォルニアにいる矢代に手紙を書いている (no. 114)。『ルネサンスのイタリア画家』日本語版の緒言のなかで、矢代はカリフォルニアでベレンソン逝去の報に接してショックを受けたこと、そしてスタンフォード大学での滞在義務を終えた11月末、旧師の死を悼むために急ぎフィレンツェに向かったことを記している<sup>22</sup>。この弔問の際に、ニッキー・マリアーノから矢代に贈られた形見の品、小さな中国製の獅子の文鎮 (fig. 4) は、ベレンソンが長く机上で使っていたもので、現在も矢代家に保存されている。



fig. 4 《金銅鍍金の獅子》(ベレンソン旧蔵)、中国、南北朝時代(6世紀)、個人蔵

#### 書簡の翻刻

矢代とベレンソンの往復書簡の翻刻は、何年も前から東京文化財研究所の山梨絵美子氏が計画して少しずつ進めていたが、主にベレンソンの筆跡を読み取ることの難しさから中断を余儀なくされていた。今回の翻刻の完了と公刊は、實際上、ジョナサン・ネルソン氏をはじめとするヴィッラ・イ・タッティのスタッフが計画に参加することになったことにより可能になったものである。

手書きのベレンソン書簡はサーン・ウェレンが翻刻し、イラリア・デッラ・モニカとジョヴァンニ・パッリアルローが監修した。矢代書簡は山梨絵美子、中村明子、越川倫明が翻刻し、越川が全体を編集した。翻刻の校正作業では、小林亜起子、深田麻里亜、友岡真秀の協力を得た。矢代書簡には、稀に些細なスペルの

誤記や文法的な誤りが含まれている。これらは、文意の解釈にはまったく影響しない程度のものであるため、あえて煩雑に注記することなく修正を加えた。

\*\*\*

矢代の没後 40 年にあたる 2015 年に（同時に、ベレンソンの生誕 150 周年にもあたる）往復書簡の翻刻・公刊を実現できたことは、企画者である私たちの大いに喜びとするところである。書簡の翻刻は、主に二つの意義があると考えている。第一に、矢代は自らの経験を自伝『私の美術遍歴』等のなかですでに回想として多く語ってはいるが、一方で往復書簡は、矢代のおりおりの人間的所感をいわばリアルタイムで伝えている点で、既刊行の回想とはまた異なった生涯の記録となっている点である。第二に、日本における美術史研究の偉大な先駆者としての矢代の生涯と業績を今一度ふり返り、現在の状況に照らしてその意味を考える契機となることを期待したい。組織的な写真の収集、様式批判の方法論的意義、比較美術史的視点、東と西の問題、普遍主義と文脈主義等々、今日の私たちに関わる多くの方法論上の問題が、すでに矢代の経験と関心のなかに先鋭に表われているといえるのである。

## 註

- 1 Y. Yashiro, *Sandro Botticelli*, 3 vols., London, 1925. 改訂第二版は以下である。Y. Yashiro, *Sandro Botticelli and the Florentine Renaissance*, London, 1929. 改訂版に基づく邦訳版は以下である。矢代幸雄『サンドロ・ボッティチェリ』、吉川逸治・摩寿意善郎監修、高階秀爾・佐々木英也・池上忠治・生田圓訳、岩波書店、1977 年。なお、1925 年の初版の全文は、上記オンライン展で読むことができる (<http://yashiro.itatti.harvard.edu/botticelli>)。
- 2 矢代の生涯と業績に関する簡潔だが的確な概観は、上記オンライン展に再録 (<http://yashiro.itatti.harvard.edu/akira-takagishi>) されている高岸輝氏の次の論考を参照されたい。A. Takagishi, "A Twentieth-Century Dream with a Twenty-First-Century Outlook: Yashiro Yukio, a Japanese Historian of Western Art, and His Conception of Institutions for the Study of East Asian Art," in *Asian Art in the Twenty-First Century*, Williamstown (MA), 2007, pp. 138-148.
- 3 矢代と美術研究所については、上記オンライン展に収録されている山梨絵美子氏の次の論考を参照。E. Yamanashi, "Yukio Yashiro and the Institute of Art Research: Realizing the Goal of Introducing Berenson's Methodology to Japan" (<http://yashiro.itatti.harvard.edu/Yamanashi>)。また、矢代自身が記した研究所設立趣意については、以下を参照。矢代幸雄「美術研究所の設立と『美術研究』の発刊」、『美術研究』、創刊号（1932 年）、pp. 1-7 (<http://www.tobunken.go.jp/~joho/pdf/yashiro01.pdf>)。
- 4 N. Mariano, *The Berenson Archive: An Inventory of Correspondence*, Cambridge (MA), 1965, p. 111.
- 5 上記オンライン展に寄せた矢代若葉氏の次の序文を参照。W. Yashiro, "A Letter from Wakaba Yashiro" (<http://yashiro.itatti.harvard.edu/wakaba-yashiro-preface>)。
- 6 同館では、2005 年に矢代家からの寄託・寄贈資料を中心に次の資料展を開催している。『矢代幸雄資料展』、神奈川県立近代美術館（葉山）、2005 年。
- 7 この手紙については、以下を参照。矢代幸雄「監修者の言葉」、ベレンソン『ルネッサンスのイタリア画家』所収、矢代幸雄監修、山田智三郎・摩寿意善郎・吉川逸治・新規矩男訳、新潮社、1961 年、pp. 29-31（再録：矢代幸雄『忘れ得ぬ人びと—矢代幸雄美術論集 I』、岩波書店、1984 年、pp. 127-131）。
- 8 このホテルは現在もアルノ河畔で営業しているホテル・ベルキエリ。矢代はフィレンツェのホテルに滞在する必要があるときにここを定宿としていたようである。アルノ河畔を描いたよく知られている矢代の水彩画（神奈川県立近代美術館編『矢代幸雄資料展』、前掲書、no. 23）は、おそらく矢代が 1921 年にフィレンツェに到着してまもない頃、このホテルの窓から描かれたもので、対岸のボルゴ・サン・ヤコポ地区のいくつかの建物を描いている。
- 9 美術研究所の設立経緯については、矢代自身が次の文章で回想している。矢代幸雄『私の美術遍歴』、岩波書店、1972 年、14 章「東洋に帰る—美術研究所の設立」参照。
- 10 ロバート・ウィット(1872-1952)は、現在ロンドン大学コートールド研究所の付属施設となっている美術写真の大コレクション「ウィット・ライブラリー」の創始者。矢代が美術研究所設立時に、ウィットの写真コレクションの方針を参考にしたことは、上記註 9 に挙げた回想に詳しく述べられている。
- 11 矢代『私の美術遍歴』、前掲書、17-18 章を参照。
- 12 この画卷断片については、以下を参照。L. P. Roberts, *The Bernard Berenson Collection of oriental Art at Villa I Tatti*, New York, 1991, pp. 27-31, no. 2. 矢代はその後、以下でこの画卷に関連する論考を発表している。「宋模周文矩宮中図」、『美術研究』、



- 25号(1934年)、pp. 1-12; 「宋模周文矩宮中図の新断片」、『美術研究』、56号(1936年)、pp. 313-316; 「再説宋模周文矩宮中図」、『美術研究』、169号(1953年)、pp. 157-162.
- 13 たとえば、矢代はケンブリッジ(英国)のフィッツウィリアム美術館を訪問した際に、ドメニコ・ヴェネツィアーノの祭壇画ブレデッラの断片《受胎告知》を「発見」した経緯を回想している。矢代『私の美術遍歴』、前掲書、pp. 92-98.
- 14 B. Berenson, *The Drawings of Florentine Painters*, 3 vols., Chicago, 1938. 1903年に刊行された初版を大幅に改訂増補したもので、1970年に同じシカゴ大学出版会からリプリントが出版されている。このときの改訂作業には、ケネス・クラークが助手を務めた。
- 15 ヴィットラ・イ・タッティに保管されている矢代の書簡の当該箇所には、ベレンソンがタイピングを指示したと思われる波線が残されており、また、タイプされた部分の写しも保存されている。
- 16 この展覧会は、以下である。*Exhibition of Japanese Painting and Sculpture, Sponsored by the Government of Japan*, National Gallery of Art, Washington, The Metropolitan Museum of Art, New York, Museum of Fine Arts, Boston, Seattle Art Museum, Seattle, 1953.
- 17 新潮社から刊行された。上記註7参照。
- 18 この膨大なカタログは、1957年からベレンソン没後の1968年にかけて、ロンドンのファイドン社から計7冊で刊行された。B. Berenson, *Italian Pictures of the Renaissance: Venetian School*, 2 vols., London, 1957; *Florentine School*, 2 vols., London, 1963; *Central Italian and North Italian Schools*, 3 vols., London, 1968.
- 19 E. H. Gombrich, *Story of Art*, London, 1950. 邦訳: ゴンブリッチ『美術の物語』、天野衛ほか訳、ファイドン、2007年。
- 20 Y. Yashiro, *2000 Years of Japanese Art*, edited by P. C. Swann, London, 1958. 同書には以下のベレンソンへの献辞が添えられている。“This work is respectfully dedicated to Bernard Berenson who in my youth guided me through my Italian studies, opening for me the door to Western art, and whose inspiration has illuminated and enriched my work in Eastern fields.”
- 21 上記註7参照。
- 22 以下を参照。矢代「監修者の言葉」、『ルネッサンスのイタリア画家』、前掲書、pp. 32-34(再録: 矢代『忘れ得ぬ人びと』、pp. 132-137)。

## [図版クレジット]

figs. 1-4 矢代家

## 付表: 書簡一覧

BB: バーナード・ベレンソン; MB: メアリー・ベレンソン; NM: ニッキー・マリアーノ; EB: エリザベス・ベレンソン

no.	date	sender/ recipient	place of dispatch
1	19231110	Yashiro to MB	from Hotel Roosevelt, Paris
2	19240110	Yashiro to MB	from Golders Green, London
3	19240111	Yashiro to MB	from Golders Green, postscript to no. 2
4	192402xx	Yashiro to MB	from Milan
5	192406xx	Yashiro to BB&MB	from Hotel Berchielli, Florence
6	19240721	Yashiro to BB&MB	from Abetone, near Pistoia
7	19240817	Yashiro to BB&MB	from Golders Green, London
8	19240822	Yashiro to BB	from London
9	19240825	Yashiro to MB	from Golders Green, London
10	19240909	Yashiro to MB	from Golders Green, London
11	19241105	Yashiro to BB&MB	from London
12	19241215	Yashiro to MB	from London
13	19250102	Yashiro to BB&MB	from Boston
14	19271004	Yashiro to BB&MB	from London
15	19280217	Yashiro to BB	from Hotel Berchielli, Florence
16	19280418	Yashiro to BB	from Helsinki
17	19280801	Yashiro to BB	from Tokyo

no.	date	sender/ recipient	place of dispatch
18	19330714	Yashiro to BB	from Tokyo
19	19330804	BB to Yashiro	from Consuma (Tuscany)
20	19330906	Yashiro to BB	from Tokyo
21	19331010	BB to Yashiro	from Settignano
22	19331229	BB to Yashiro	from Settignano
23	19350107	Yashiro to BB	from Tokyo
24	19360120	Yashiro to BB	from Hotel Bristol, Paris
25	19360131	BB to Yashiro	from Settignano
26	19360326	Yashiro to BB	from Tokyo
27	19370901	BB to Yashiro	from Settignano
28	19370927	Yashiro to BB	from Tokyo
29	19370928	Yashiro to BB	from Tokyo
30	19400130	Yashiro to BB	from Tokyo
31	19400304	BB to Yashiro	from Settignano
32	19400423	BB to Yashiro	postcard, from Settignano
33	19400524	Yashiro to BB	4 postcards, from Tokyo
34	19401217	Yashiro to BB	from Tokyo

no.	date	sender/ recipient	place of dispatch
35	19420913	BB to Yashiro	postcard, from Settignano
36	19480509	Yashiro to BB	from Oiso
37	19480711	BB to Yashiro	postcard, from Settignano
38	19480815	BB to Yashiro	from Settignano
39	19481202	Yashiro to BB	from Oiso
40	19490501	BB to Yashiro	from Settignano
41	19491212	Yashiro to BB	from Oiso
42	19500719	Yashiro to BB	from Oiso
43	19500928	BB to Yashiro	from Vallombrosa
44	19510416	Yashiro to BB	from Oiso
45	19510615	BB to Yashiro	from Turin
46	19510923	Yashiro to BB	from Oiso
47	19511007	BB to Yashiro	from Ischia, Naples
48	19511114	Yashiro to BB	from London
49	19511118	BB to Yashiro	from Settignano
50	19520106	Yashiro to BB	written in Settignano
51	19520122	Yashiro to BB	from Paris
52	19520309	Yashiro to BB	aerogram, from Washington, D.C.
53	19520602	Yashiro to BB	from Oiso
54	19521030	Yashiro to BB	from Oiso
55	19521107	BB to Yashiro	from Eden Hotel, Rome
56	19521116	Yashiro to BB	from Tokyo
57	19521128	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
58	19521215	BB to Yashiro	from Settignano
59	19521229	BB to Yashiro	from Settignano
60	19530122	BB to Yashiro	from Settignano
61	19530407	Yashiro to BB	from Harvard Club, Boston
62	19530410	BB to Yashiro	from Settignano (to Yashiro in New York)
63	19530528	Yashiro to BB	from Oiso
64	19530608	BB to Yashiro	from Palermo
65	19531008	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
66	19531022	BB to Yashiro	from Settignano
67	19540305	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
68	19540411	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
69	19540420	BB to Yashiro	from Settignano
70	19541125	BB to Yashiro	from Settignano
71	19541201	Yashiro to BB	2 aerograms, from Oiso
72	19550104	BB to Yashiro	from Settignano
73	19550426	BB to Yashiro	from Settignano
74	19550505	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso

no.	date	sender/ recipient	place of dispatch
75	19550513	BB to Yashiro	from Tripoli
76	19550704	BB to Yashiro	from Settignano
77	19550805	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
78	19550811	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
79	19550815	BB to Yashiro	from Vallombrosa
80	19550910	BB to Yashiro	from Vallombrosa
81	19550917	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
82	19551022	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
83	19551121	BB to Yashiro	from Settignano
84	19551127	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
85	19551207	BB to Yashiro	from Settignano
86	19551230	BB to Yashiro	from Settignano
87	19560216	BB to Yashiro	from Settignano
88	19560225	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
89	19560726	Yashiro to BB	from Hotel Eicher, Zurich
90	19560729	BB to Yashiro	from Vallombrosa
91	19560801	Yashiro to BB	from Rome
92	19560822	Yashiro to BB	from Oiso
93	19560905	BB to Yashiro	from Vallombrosa
94	19561031	Yashiro to BB	from Oiso
95	19561107	BB to Yashiro	from Settignano
96	19561130	NM to Yashiro	from Settignano
97	19570303	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
98	19570307	BB to Yashiro	from Settignano
99	19570329	Yashiro to BB	from Oiso
100	19570406	BB to Yashiro	from Settignano
101	19570627	Yashiro to BB	from Oiso
102	19570703	BB to Yashiro	from Settignano
103	19570819	BB to Yashiro	from Vallombrosa
104	19570913	Yashiro to BB	from hospital in Tokyo
105	19571002	BB to Yashiro	from Settignano
106	19571208	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
107	19571214	BB to Yashiro	from Settignano
108	19571228	BB to Yashiro	from Settignano
109	19580120	Yashiro to BB	aerogram, from Oiso
110	19590201	Yashiro to BB	from Oiso
111	19590216	NM to Yashiro	from Settignano
112	19590304	NM to Yashiro	from Settignano
113	19590524	Yashiro to BB	from Oiso
114	19591018	EB to Yashiro	from Settignano (to Yashiro in California)